

小田実全集（評論 第11巻）

「民」の論理、「軍」の論理



講談社

小田実全集

Makoto Oda

目次

I	南海の孤島のことから	5
II	三十有余年の「時間の旅」	37
III	「軍服」を着た「文明」と「正義」	65
IV	「戦後世界」の構造と動き	112
V	「民」の論理と「国家」の壁	142
VI	「国家」が、そして、「西洋」がまき返す	166
VII	「新しい日本」の「新しい日本人」として	199

まえがき

と言つても、ほんの数行です。このまえ書いて岩波新書で出した『世直しの倫理と論理』が私の「哲学」にあたるものなら、この本は、私の「政治学」です。そのうち、私の「政治学」の実際の状況への適用について考えてもみたいし、私の「文化論」、私の「経済学」も考え出そうと志こころざししていますが、まずは、世界の動き、人間の動きの「政治学」です。この本にこれから述べて行こうとする「民」の論理は、「民」のめいめいがそれぞれに考えることが前提になっています。私もその「民」のひとりです。（一九七八年の「八月十五日」をまえにして）

I 南海の孤島のことから

IIのブロードウェイ

ブロードウェイのことから書きます。二つのブロードウェイのことです。

昨一九七七年——と言っても、ついこのあいだのことですが、大ミソカの深夜に私はニューヨークのブロードウェイの路上に立っていました。一昨年夏にもアメリカ合州国に出かける機会があったので一年半ぶりのアメリカ合州国というわけですが、そのあいだにあつた主な変化というのは、まず、フォード政権がカーター政権にとつて代わられたということでしょう。一昨年夏にもニューヨークにいて、そのときはアメリカ合州国は「独立二百年祭」とかいうお祭り騒ぎの最中でしたが（と言っても、たいしたお祭り騒ぎでもなかったようです。何んだか無理して祝っているという感じは否めませんでした）、それにしても、この本の主題にも関係するアメリカ合州国の「自信の回復」には何かの役に立ったようです）、もうひとつ、そのときもつと大事なお祭り騒ぎがニューヨークでは行なわれていて、それがカーターさんを民主党の大統領候補に指名することに決めた民主党大会でした。黒人の女性政治家が基本になる演説者のひとりになったりして話題を呼んでいましたが、テレビジョンでその雄弁、そして、いかにも有能に見えた黒人の中年女性がジェファースンのことには言及しても、ひとりとして黒人政治家や運動者のことは口にしなかったことに私はかえっておどろいていました。マー

ティン・ルーサー・キングの名前さえ出て来なかったから、ふしぎというより異様な感じがしました。黒人であり女性である自分がこんなふうな重要な役割を演じていると演説のはじめのところで力をこめて言っていたにもかかわらずにです。黒人のそうした運動者の名前が出て来なかったので、何んだか、そうした役割も白人の恩恵によつてあたえられたのだと言っているふうな感じをもったことも事実です。

フォード政権からカーター政権に変わったことで私に関係することをさきに書いておけば、これは私の入国査証にかかわることがらですが、フォード政権のときはまず二倍もなく拒否されてから、大新聞社の力を借りてすったもんだの交渉の上、三カ月有効で二回入国できるという査証をしぶしぶくれました。今度もたしかに問題になりましたが、それでも、「今回はオダさんは誰に会いに行きますか」という質問に「今度はオダさんはべつに誰にも会いに行きません。今回は久しぶりに西部から中西部にかけてアメリカ合州国の広大な景色を見に行きます」という答で査証をくれました。あいかわらずの二回きりの入国許可ですが、それでも有効期間が半年となつたのはめでたしめでたしです。さらに昔のニクソン政権のときは、まず拒否、それからすったもんだの末、私を講演旅行に招いてくれたいろんな大学の圧力で査証を出したはよいが、サンフランシスコの入国管理事務所ですら足止め、ワシントンまで行ってくれというので宙ブランのまま出かけて移民局長と会談した。あげくのはてに「某月某日 ワシントン、都市区域以外に出ることを禁ず」というような条件付きの「ひところの共産主義国なみ」（と私を招いてくれた当時のベトナム反戦運動の活動家たちは言っていました）の待遇を受けてやつとこさ入国できたときのことを考えると、たしかに、カーターさんの「人権外交」もこの

私の入国査証というチップケな問題にまで及んでいるのかも知れません。

前おきが長くなつたみたいですが、実を言うと、このアメリカ合州国行が私にとって足かけ二十年ぶりのアメリカ合州国滞在であつたわけです。一九五八年夏にフルブライト留学生として出かけて次の年の秋までいたのですから、まあ二十年経つたと言つてよいでしょう。二十年というひとひつの、いや、「十年ひと昔」と言いますから、ふたつの区切りと言つてもよいでしょう。思えば、長いアメリカ合州国とのつきあいです。それがどれだけの長さかという、これは、やはり、さつきの黒人女性政治家が言つていたように、昔には彼女のような存在が民主党大会の基本の演説者になつたりするようなことは考えられもしなかつた——二十年昔にもそうだつた、というぐあいに言うのがいちばん判りいいことだと思ひます。『何でも見てやろう』という旅行記めいた本のなかにも書いたことですが、それどころか、その二十年昔には、南部に行けば、駅の待合室にも手洗いにも「白人用」、「有色人用」の区別が厳然として存在していた。なにしろマーティン・ルーサー・キングさんたちが運動を始めてまだほんの数年しか時間が経つていないころのことで、「公民権運動」という名称もその実体とともにまだ存在していなかつた。それは、待合室や手洗いの区別の厳然たる存在とちようど入れ子になつてあつた事実です。

そのころのことを、「アメリカ合州国最後の古き良き時代」だというふうにひところ人はよく言つていましたが（このごろ言わなくなつたことも興味ある事実です。それだけ、人びとは自信を回復して来ているのかも知れませんが）、たしかに、あの時代、アメリカ合州国人は——と言つても、肌色が白、アメリカ合州国人はというぐあいに言つておく必要があるでしょうが、おしなべて言つて、自分

昨年の大ミソカの深夜、ブロードウェイに立っていたのは、二十年前にもそんなふうにして立っていたからです。アメリカ合州国には中国人街やイタリア人街というようなのを除けばどこにもろくなお祭りがないので、あんなくだらぬものを見物するのに人びとが、ボストンあたりからでも車やバスでわざわざニューヨークくんだりまでやつて来るというのが私の仮説ですが、ブロードウェイはタイムズ・スクエアに立つニューヨーク・タイムズの建物のてっぺんの避雷針に光り輝く球がとりつけられてそれが下へ降りて行く。直下の電光掲示板に「あと何秒」というようなのが出て、それがめでたく「0秒」となったところで、それまで騒ぎ立てていた群集がいつせいに叫ぶ、爆竹を鳴らす、あるいはキッスをする——二十年前にくらべて、騒ぎの度合いはいっそう大きいようでした。あるいは「法と秩序」をのりこえる度合いが大きくなったと言つてもよいでしょうか。まず、かまわずゴミをまき散らす、信号灯にまでよじ登つて「ハッピー・ニュー・イヤー」を叫ぶのがある。そのあたり、「ポルノ映画」やらその趣向のものを売る店が多いところですが、それなども二十年前には考えられなかったことでしょう。金持たちは自分のアパートに人を招いてパーティをしたり、さもなければ、ナイト・クラブでドンチャン騒ぎをしていたりするので、どうせそういうところに来るのは金にも権力にもさしてエンのない連中でしょうが、二十年前にくらべて、何んだかヤケのあげくのはての騒ぎ方でした。しかし、それでいて、ふと感じたのは、「アメリカはまたアメリカになった」という感じです。その感じも否めないものとしてあつた。

その感じは、それまでに何日かいて、街をうろついたり、人の書いたものを読んだり、昔の知己や友人たちと会つたりしているうちにかもし出されて来た感じですが、もうひとつ、そういう感じをい

やおうなしにもったのは、私がつい二月ほどまえにべつのブロードウェイを見てその上を歩いたからでないかと思えます。そのべつのブロードウェイというのは、ニューヨークのブロードウェイのほうはこれはもう誰だつて知つてゐることなのにちがいありませんが、こちらのほうは逆に誰ひとりとして知らないにちがいない、中部太平洋はるかかなたのところにあるテニアン島のブロードウェイのこ
とです。

年配の人なら、サイパン島と並べて記憶の底にその名前をとどめてゐるにちがいないこの島のかたちは、ニューヨークのブロードウェイが所在するマンハッタン島によく似てゐるそうです。そこには「ヒロシマ」、「ナガサキ」に投下された原子爆弾を積んだB-29機が発進した基地があつたことは世によく知られた事実ですが、その「ナガサキ」での原爆投下を目撃した唯一のジャーナリストであるウィリアム・L・ローレンスさんは（彼はニュー・メキシコの原野での最初の実験のジャーナリストとしてただひとりの目撃者でもあります）、彼の著書『0の暁』のなかで次のように書いています。「その道路や街路は（まさしくニューヨークから来たホームシックの男に設計されて）マンハッタン島の輪廓を形造るようにつくられ、多くの南北に走る広い並木路や東西に走る交叉道路が設けられていた。私がテニアン島に滞在した一カ月の間、原子爆弾科学者たちと一緒に暮してゐた二一のテントから成る小さな原子都市は、タイムズ・スクエアの近くにあつた。B-29が広島や長崎に向つて出発した飛行場は上マンハッタン^{かみ}の近くだつた。ブロードウェイと第八アベニューが二つの主要道路で、この道を原子爆弾関係者たちが、夜となく昼となく、殆ど何時でも、ジープやトラックで爆弾組立所へ往つたり来たりしてゐた。」（崎川範行氏の訳文による。以下、『0の暁』は崎川氏の訳文によるが、地名など、一

部語句は変えた)

そのころのテニアン島は「一つの奇蹟」であつたそうです。「サンフランシスコから六、〇〇〇マイルのこの場所に合州国軍隊は世界最大の空港を建設した」からです。「殆ど二マイルに及ぶ立派な滑走路」が何本も並んで、「これらの滑走路の傍に、一〇は愚か一〇〇をもつて算する偉大な銀翼が長く列をなして並んでいた。マンハッタン島より小さいこの島は、空中から見ると、ちょうど甲板に爆撃機を搭載した一大航空母艦であつた。」

そこから十五秒に一機の割合でB-29機は何百機と日本へむけて爆撃に飛んで行つたそうです。サイパン島の基地とあわせて使われていて、そのあたりのことになると、大阪でその二島からの空襲をしょっちゅう受けていた私の記憶にもなまなましい。テニアン島の基地からの最初の空襲が神戸であつたということも身近に何やらなまぐさい感じですが、そのあと「ヒロシマ」、「ナガサキ」の極限にまで達する。このあたり、テニアン島は西日本にとりわけ関係が深いのかも知れません。

空から見ると、たしかにこの島は航空母艦に見えます。私はサイパン島からチップケなチャーター機でゆらりゆらりと飛んで行つたので(まっすぐ飛んでそのチップケ機で十五分ほどの距離です)しさいに全体を見ることができたのですが、今は航空母艦は航空母艦でも、「サイエンス・フィクション」ばりの航空母艦です。マンハッタン島より少し小さいというこの島は南端あたり(そこから東海岸を北に少し上つて行くと、テニアン島の攻防戦のみぎり追いつめられた日本人が身を投げて自殺した「^{シーサイド・クリフ}自殺断崖」があります。行つてみましたが、なだらかできれいな草原がつづいているのが、はしのところでストンと切れている。それはほんとうにストンという感じで、かえつて不気味です)が

少し隆起して丘になっているほかは全島平らで、昔はまさに航空母艦のようにむき出しの軍事基地だったのですが、今は「タガンタガン」という名前のネム科の一種の樹木のジャングルにおおわれていて、もちろんそれだけのことなら何んのへんてつもない南海の一孤島ですが、テニアン島にはただひとつきわだつてちがつたところがあつて、それはその「タガンタガン」のミドリのなかに白い滑走路が何本も見えることだ。北部と中部に滑走路は見えるのですが、私のチツボケ・チャーター機のパイロット（もとは海軍の軍人だったそうです。サイパン島、テニアン島あたり、そういうもと軍人のアメリカ合州国人のひと旗組にみちています）は、やにわに「オイ、見ろよ、あれが原爆を積み込んだところだ」と肩を突つついていました。「こつちが『ヒロシマ』、あつちが『ナガサキ』——たしかに、ヤシの木と、これはあとで地上から行つて見て判つたことですが、プルメリアという名の樹木の下、記念碑が見えて、その二つがそもそもの大虐殺の出発点でした。

そして、その大虐殺の出発点だった基地から南方へ一本大きくのびて行く道路があつて、それがローレンスさんたちが言うブロードウェイです。空からもその道はミドリのなかを一本の矢のようにつらぬいて行く道として見えました、地上に降り立つてからも車で走つてみました。みごとに大きな道路で、さすがにアメリカ合州国が巨大な費用をかけてつくつた道路だけに三十有余年のあとも十分に使用に耐えます。今は車の姿ひとつないだつ広い道路ですが、往時は夜となく昼となく爆弾を積んだトラックが往復していたそうです。その爆弾のなかには、のちに帰路で日本の潜水艦に撃沈されることになる巡洋艦「インディアナポリス」に積み込まれてはるばるとサンフランシスコからテニアン島南端の港にまで運ばれて来た原子爆弾もふくまれていたことでしょうが、しかし、今は、夏草やつ

わものどもが夢のあと——

いや、実はそうあつて欲しいものです。

引きさがつて固める

ことは、実はそうあつて欲しいのが、どうにもそういうことにならなくなろうとしている、そこから始まります。いやおうなしに、つわものどもが夢がまたぞろ、かたちを変えて、しかし、本質は同じものとして始まろうとしている。

今、旅先のメキシコの小さな田舎町でこの本を書き始めていますので日本でどのような報道がされたのか知らないのですが、たしかこの一月の十日に、サイパン、テニアン両島を中心とするマリアナ群島は「北マリアナ」という名前でアメリカ合州国の「自治州」コモンウェルスとなつたはずで、「自治州」というと何やらきこえはよいですが、もうひとつアメリカ合州国には「自治州」があつて、それはプエルトリコだと言え、もうことのありよう、その悲惨のありようがたちどころに判るでしょう。つまり、ていのいい植民地です。この民族自決、すべての民族がそれぞれに解放と独立を求めているはずの時代に、独立——すくなくともそれへの可能性を失つて大国の実質上の植民地になろうというのですから、何をか言わんやです。その何をか言わんやということについて当のアメリカ合州国人がどう考えているかということになると、まずもつて、進歩派、革命派の人びとをふくめて、何ごとも知らない。たかだか言つて、「たしかそんな話をきいたことがあつたな。」

世界のニュースのことは何んでも書いてあるはずのニュース週刊誌『タイム』の記事もひどいもの

でした。同じニュース週刊誌の『ニューズ・ウィーク』のほうは完全に無視してしまっているのだしもちろんのほうがましかも知れませんが、サイパン島は長年のミクロネシア全体の信託統治のなかでもっともアメリカ化されているとか、政府が大きくてお役人が多いとか、はたまた、日本の新婚客と「遺骨拾い」の人たち（「ボーン・ピッカー」と書いてありました）があまた来るとか、そんな無害無益のことばかり書いてあつて、どうにもかんじんカナメになることが書かれていない。記事を書いた『タイム』の記者が知らないはずもないと思うのですが、もし知らないでこのあたりの島のことを記事にしていたらゆるしがたい無知だし、知つていて書かなかつたとしたら、これはもう天人にもゆるすべからざる罪悪だ。ジャーナリストの風上にもおけない人物です。

この記事を読んでいて、まずもつて悲しいのは、この独立を失つて植民地になるという、ひとつの民族にとつてのもつとも悲しむべき日の日づけが記事をよんでいても一向にはつきりして来ないことです。つまり、記事の書き手にとつてそんな日の日づけのことなどどうでもよいことだったのでしょうが、念のために次の週の『タイム』にはその日のことが、その悲しむべき「儀式」の詳細とともに出ているかも知れないと思つて買つてみたのですが、もう自分が新しく植民地にした「北マリアナ」のことなど影もかたちもなかつた。きれいなサッパリとしたものです。そんなチツポケな島が自分につけ加わるうがどうしようが、たいした問題ではないのにちがいない。

しかし、そんなら、なぜ最近になつてにわかにカーターさんの政権がこのあたりのことで動き始めたかということですか。カーターさんの政権になつてことが動き始めたとはさすがに『タイム』も言つていましたが、ふしぎなことにその指摘から故意にか無知によるためかまつたく落とされていること

があつて、それが私の言うかんじんカナメのことです。そのかんじんカナメのことがなければ、一連の最近の動き、どうにも起こりそうにもなかった。

一口に言つてしまえば、カーターさんがひきいるアメリカ合州国の世界戦略体制（アホらしいことをつけ加えて言つておきたいのですが、カーターさんは何も「人権外交」だけをひきいるのではない。「中性子爆弾」も戦略体制もひきいている人物です）の変化ということになるのですが、もちろん、これはもう少し時間をさかのぼらせて言えば、ベトナム戦争の敗北以後のアメリカ合州国の世界戦略体制の本格的たてなおしということになります。

そのことについて言えば、フォードさんは、やはり、才覚の乏しい人物で、言つてみれば彼のしたことは暫定的な処置で、カーターさんほどには本格的にとりかかろうとしたのではなかった。そこへ行くと、カーターさんは、さすがにひとつの構想をもつてその問題にまっ正面から取り組もうとしているように見えるのですが、その構想は簡単に言えばこうでしょう。引きさがるところまでは思ひきつて引きさがる。そこからは、一歩も引かないで地固めをする。かえつて、それで強くする。強くなる。

そこで人びとは独立を失う

アジアについて言えば、朝鮮半島からは、まず、引きさがるといふわけでしょう。そして、沖縄——彼らの頭のなかでは、もちろん、そういう漢字名前で存在しているわけではないのでこは「オキナワ」というぐあいに書いておきたいのですが、いくら無理難題を今も押しきつていと言つてもそ

こはやはり日本で、とことんのところ保証したい。それでグアム島ということになりますが、それだけでは心もとない。そこで眼をつけたのが、かつての世界最大の基地、「不沈空母」のテナアン島です。結論から先に言ってしまうと、今、アメリカ合衆国はこの島の面積の三分の二に及ぶ地域をこれから百年のあいだ「借りて」（五十年経つと、「北マリアナ自治州」の政府側とアメリカ合衆国の中央政府はあとの五十年をどうするか話し合うことになっているそうです。もちろん、そのとき働くのは両者の力関係で、力のあるほうが必要と思えば存続する、いらなくなっていれば返すということになるでしょうが、逆に言うと、力のない側——それはいつだって「北マリアナ」側であるのにきまっています。ですが、そのときになってそちらがどんなに返してくれと言ったって返してくれるものではない。「大国」日本のなかの基地だつて返してくれないのですから）世界最大の基地をそこにつくろうとしているわけです。テナアン島のサンホセ村の村長のフィリップ・メンデオラさんの話では、ここ二、三年のあいだにつくるのではないかということですが、そのときには住民わずか八百人のこの島にすくなくとも二、三万のアメリカ合衆国軍関係者が住みつくことになって、もちろん、それではメンデオラさんも言っていたように、アメリカ合衆国軍による島の完全占領です。

アメリカ合衆国が「自治州」設立と引きかえに要求しているのは、ほかにサイパン島の旧基地あたりの土地や（一朝ことあるときには使うということです）、爆撃訓練に使うためのはるか北方のファラロン・デ・メディニラ島がありますが、やはり、かんじんカナメはテナアン島でしょう。原子爆弾の地下貯蔵庫は今でもあるだろうし、滑走路も昔の面影をとどめているし、それにもっともかんじんなことは、さつきも言いましたが、まわり一面は「タガタガン」のジャングルで、そのあたり、こ

いうときに立退き問題やら何やらで必ずやつかいなことになる農地は、わずかにアメリカ合州国人の経営する牧場があるくらいで、どこにもない。

ここで「タガンタガン」という奇妙な名前の樹木について、そのジャングル状の繁殖について一言しておかなければならないのですが、それは『タイム』の前述の記事の筆者もサイパン、テニアン両島で目立つ事物のひとつとして書いていたことなので、繁茂のしぶりはよほどのものです。ただ、もととはそういう樹木は島にはなかったというところで、ふしぎに思つて訊いてみると、アメリカ合州国軍が空中からタネをまいて行つたという話でした。なぜそんなことをしたのかということになると、話は二手にわかれて、一方は『タイム』の記者が書いていたことで、もともとはこのあたりはサンゴ礁なので土壌が弱い（サンゴ礁を埋め立ててテニアン島ではあの世界最大の基地をつくつたものの本に書いてありました）、それで崩壊を防ぐためにこの樹木のタネをまいて行つたというのですが、テニアン島の島民のほうはそういう理由を誰ひとりとして信じていないようでした。彼らに言わせると、その根つ子が深く引つこぬぎにくい、農業をするのにはまことにやつかいな樹木を滑走路のまわり一面に繁茂させることで農業をまつたくさせないようにしたということになります。

その狙いは次のようなものでなかったのかとメンデオラさんは言います。まず、それで農業を立ち行かなくさせて、島民のくらしをどうにもアメリカ合州国に依存しなければやつて行けないようになる。おまけに、それで、かつての基地があつた土地のあたりはまつたく手つかずのまま残されることになる。とき至れば、それをふたたびわがものとして使う——メンデオラさんが、かつて日本の会社（「南洋興発」です。かつて、そのあたりを「開発」してまわつた会社です。生産物はサトウですが、

その会社の功労者の巨大な銅像があのかくさくぐり抜けてサイパン島のどまんかにいまだに立っているのはふしぎな感じがします。銅像の台座の文字を書いているのは「子爵斎藤実」で、こちらのほうは朝鮮総督として歴史に名前を残している人物です）で働き、そのあと Guam 島で日本軍といっしょにアメリカ合州国軍とたたかうなかでならいおぼえた自まえの日本語で語ったことをまとめ上げれば、言えはそういうことになるでしょう。アメリカはうまいことや、日本人なら Genko と言うことをきかせるだろうが、アメリカは長いあいだかかってことをきめる——そんなふうに村長さんはガイタンするように言っていました。「自治州」としての併合までの過程を見てもそうだとおっしゃっていました。長いあいだかかって民主的にやる。まず、全面的にくらしをアメリカ合州国に依存しなければならぬとおく。この三十有余年のあいだ、アメリカ合州国は将来くらしの基本になるようなことは島民に何ひとつ教えなかつたし、手だてをつくり出しもしなかつた。それでいて、高度の消費経済だけはもち込む。『タイム』の記者も書いていましたが、大きなスーパー・マーケットが建つて、そこへ行けばリーバイスのジーンズからカリフォルニア産のブドウ酒まで何でもある、家には冷房装置をとりつける、車は誰でもがもつ——そういうくらしが可能になったのはアメリカ合州国にたよればこそで、「自主独立」の道をとるとそうはいかない。さらに行政面だけは奇妙に整備されていて、お役人の数がむやみと多い。働いている人間の半数がお役人だというのですから、こんな頭デッカチの政府を産業が何もなくて支えられるはずはない。これもアメリカ合州国にメシを食わせてもらっていたおかげだというわけです。

ご承知でしょうが、念のために言っておきましょう。そのあたり、これまでのところはアメリカ合

州国に行政がまかされていた「国連信託統治領」でした。かつては日本の「南洋」と一般に呼ばれた「信託統治領」で、そのときは「国際連合」ではなく「国際連盟」から日本は信託されていたことになっていました。もつとも本筋のところは植民地です。日本のまえがドイツで、ドイツのまえがスペインで、植民地になることで四代目で、その長い植民地の歴史はマゼランの「発見」、それにひきつづいての虐殺、支配に始まります。ついでのことに言っておきますと、いまだに日本の学校の世界史の教科書には、そういう西洋人による「発見」がきれいに書いてありますが、メキシコの小学校用の教科書にはそんなアホな表現は見あたりません。西洋人に「発見」してもらうまえに、現地の人間はそこに何千年となく住んでいたのです。さらについでのになりますが、メキシコでは小学生にも四年生から三年間にわたって世界史を教えます。メキシコ自体をもそのなかにふくみ込んだ世界史で、ピカソも出て来ればマチスも出て来る。ボルシェビキも人民解放軍もそのままのことばで出て来る、おしまいあたりは毛沢東、ホーチミンが活躍するというみごとな国定教科書です。

そういうくらしのありよう、政治のありようをつづけて行くとなると、これはもうどうあつてもアメリカ合州国にすがって行くよりほかにない。そこへもつて来て、島民の有力者の誰かれをとつかえひつかえ合州国の視察旅行に連れて行く。プエルトリコへは決して連れて行かなかったそうですから、つまるところ、アメリカ合州国のいいところばかり見せた。併合して、アメリカ合州国になれば、おまえたちもこんないくらしができるぞというわけです。子供のときからの教育もアメリカ合州国そのままの教育で、もうその教育を受けた連中がお役人のえらいさんのなかにも数多くいるのですから、事態はもうどうしようもないところにまで追い込められていた。情報も、もちろん、かぎられています。

あちこちで人びとにプエルトリコのことを訊いても、まず知っている様子はありませんでした。そういう状況のなかで行なわれたのが、「自治州」になるかどうか、つまり、アメリカ合州国に植民地として併合されるかどうかの国民投票です。一九八一年までに、この地域の住民は独立するかどうかをきめなければならないのですが、それに先立つこと数年、三年前にははやばやとアメリカ合州国への帰属を決定していました。そこへあらわれたのがカーター政権です。これもはやばやとさまざまな手をうって、今年一月、正式にアメリカ合州国になる。その植民地となって、人びとはプエルトリコ人と同じ、たぶん、「第二級」、「第三級」の「アメリカ市民」としての取り扱いを受ける——そこまでこぎつけた。

これでまず大被害を受けるのは、八百人のテニアン島の住民でしょう。彼らはそのことを知ってか、はじめは反対派の先鋒のメンデオラさんといっしょに反対の意志表示をしていたのですが、なにしろ、メンデオラさんの言い方を借りれば、「相手は金を持つておるじやろ」で、きれいに切り崩されてしまった。いや、ことは誰が反対しようと、はじめからもうきまっていたようなものでした。「北マリアナ」全体の人口が一万四千人で、その中で八百人（赤ん坊をふくめて八百人です）がどう動こうが、全体の多数決ですべてはきまるのでどうしようもない。ここらあたりのことのありよう、三里塚の農民の立場にも似て、大いに考えさせられるものがあるのですが、さらに問題なのは、これから百年土地を貸すと言っても、その地代は一エーカー（約〇・四ヘクタール、四反）あたり一年につき九・八三ドル、日本円になおして二千円弱というところですから、おどろくほどの安さです。サイパン島の場合ももう少し高くて一一・三ドルですが、モビル石油がそこに今払っている地代は三百五十ドルというので

すから、ひどい買い叩きと言われても仕方がないでしょう。ついでにもうひとつ言えば、さつき言ったフアラロン・デ・メデイナ島の場合は、いくらそこに爆弾を落つことすだけだと言つても、一エーカーあたり一ドル、二百円弱というのですから、「北マリアナ」の人たち、踏んだり蹴つたりというところですよ。しかも、この地代は百年分をまとめて払つて、それで一切がつさい終りで、あとはどんなにインフレーションが増進しても知らないことは知らないことだ。

お金はほかにも当面の政府への援助金が七年間のあいだだけ総計千九百万ドル来る、政府の予算が今よりも大きくなつても合州国政府が相当の面倒を見てくれるというようなこともあるらしいのですが、それも「北マリアナ」全体にかかわること、テニアン島の八百人にはべつにじかにかかわつて来ることではない。地代も「北マリアナ」政府のほうに入るわけです。

「大国」というものは力にまかせてまことに勝手なことをするものだと思つておるのですが、「大国」の「大ジャーナリズム」もまことに勝手なもので、『タイム』の記事には今書いたようなことはかきも出ていなかった。まして、その当の「大国」のアメリカ合州国がテニアン島を中心として大きく戦略の立てなおしをはかろうとしているというようなことはこれっぽちもふれられていないことでした。あるいはまた、テニアン島の村長さんのような併合反対派の存在にも（「反対も反対、ボクは大反対だ」と言っていました。アメリカが来るまえ何千年も昔から自分たちはここにいた、その自分たちがなんで今アメリカにならなければならないのかと彼は言います。そして、村の求めるものは、もちろん、独立——自主独立です）、いや、併合を長年積極的にならえて今度めでたく知事に出されたカマチョさんのことだつて、名前を書いてあるだけで、彼がどんな人物か、まったくふれて

はいない。同じ記事のなかに出て来たアメリカ・サモアの知事のほうはくわしく紹介してあったのは、ひとえにそちらのほうが白人であつたからでしょうが、これだけの忠誠をつくしてもこれだけの取り扱いを受けないものかと悲しくなります。

カマチヨさんは「北マリアナ」民主党から出た知事ですが、保守派に言わせると「貧乏党」（と日本語でボスのひとりが言っていました）で、アメリカ合州国本土の民主党に会い通じるものでしょうが、この島第一の「進歩派」インテリの、アメリカ合州国の民主主義はいいものだ、それにほかに道はないじゃないか、という二様の論理の展開をきいているうちに（私が島を訪れたときが選挙戦のさなかでした。忙しいなかを——それでもヒルネをしていた最中でしたが——会ってくれて一時間ほどいろいろ話しました）、まざまざと思い起こされて来たのは、この文章のはじめのところに書いた民主党大会での黒人女性政治家の、ジェファースンにふれることはあつても誰ひとり黒人運動家にふれることのなかつた演説のことでした。あれはみごとな雄弁でした。カマチヨさんも、その二様の論理の展開をなかなかうまい英語で雄弁にしていました。

もちろん、私もアメリカ合州国の民主主義のみごとなところを認めるのにやぶさかでないのですが、ただ、そんなみごとなことを言うまえに、やはり、「大国」としての非民主主義的身勝手を言っておかなければならないと思うだけのことです。早い話、さっきの「タガンタガン」のタネまぎのことですが、アメリカ合州国側、住民側どちらの言い分が正しいにせよ、アメリカ合州国がそこを引き揚げて行くにさいして何本もの巨大な滑走路を住民のためにつぶして行きはしなかつた。したがって、土壌の崩壊を防ぐのはこれは何も住民のためではなく滑走路保持のためであつたという事実は残ります。

ここに端的に見られるのは決して人びとのくらしのことを考える「民」の論理ではなく、人びとのくらしを犠牲にしてまで基地を残しておこうとする「軍」の論理です。この後者の論理が優先しているかぎり、どのように美辞レイ句を並べたてても、民主主義はない。「草の根」民主主義をうたいあげるカーターさんの政權とて、その例外ではありません。

「民」の論理、「軍」の論理

メンデオラさんがえらいと思ったのは、そのところの問題のかんどころをおさえている人物だったからです。基地ができるのと島の経済がうるおうと主張するアメリカ合州国軍のえらいさんにむかつて彼が展開していた論理は、「民」と「軍」は根本の原理も目的もちがうということでした。「軍」は何んのためにあるかという、それは、究極的には敵である人間を殺すことで、その目的のために「軍」もあれば、「軍」に附属する経済もかたちづくられている。「民」はそのところで根本的にちがう。その原理も目的も、人間がみんなで生きる、くらしをたてるということで、たとえば、「軍」は必要がなくなればどこかへ立ち去ってしまうだろう。「民」はそうはいかない。自分たちが生まれ、くらしているところにいつまでもいる。

「軍」にしたがっていれば、「軍」に附属する経済の力で、一時的には人びとのくらしはゆたかになるかも知れない。たとえば、「ドレイとか人夫とかになつて」（とメンデオラさんは言っていました）給金をもらって食って行ける。しかし、そんなことが長つづきするはずがない。「軍」はほんとうに必要がなくなったら、さつさとそういう「民」の首を切るにちがいない。

これだけの論理を小学校しか出ていないという彼が展開して行くのですからえらいものですが、彼のえらいところはもうひとつあって、ことをただ住民の経済の問題、あるいは、権利の問題だけにかぎって見ていないことでした。つまり、それはテニアン島というひとつの島の住民の問題であるとともに、大きく外にひろがるアメリカ合州国の世界戦略の問題として見ているということでした。彼はくり返して、ここに基地ができれば、テニアン島は「世界のマト」になると言っていました。あげくのはて、テニアンの地図は世界でいちばん大きなものになる——彼はそこまでの未来の危険への見通しをもっているようでした。

彼と話していて強烈な思いで考え始めていたのは、日本で、いつのまにかアメリカ合州国基地の問題がなおざりにされてしまつて来ているという事実でした。ベトナム戦争はすんだし、それに環境問題やら資源の問題やらスタグフレイションやら「円高」やら、いろんな問題が山積みしていつのまにかそちらの問題への意識がうすれてしまつています。率直に言つて、私たちの心のなかはそういうありようを示すようなものになつていて、問題をアメリカ合州国の世界戦略とからめて考えるという視点を失つてしまつています。今や、当のアメリカ合州国のほうではテニアン島あたりを中心として戦略のたてなおし、整備を大きくとり行なおうとしているというのに、です。

そこらあたり、住民運動が自分たちの問題に深く踏み込むあまり、日本全体、あるいは、世界全体にひろがる視界の広さを失つて来ているのと入れ子になつて存在していることがらでしょう。アメリカ合州国軍の基地が今もつて島の面積の多くを占領している沖縄へ行つても、極端な言い方をすれば、基地の問題も「反戦地主」の権利闘争としてだけの問題になつてしまつているきらいはあります。た

たとえば、あそこでの韓国とかかわりあう運動の展開の仕方は、「米軍撤退」のことを大きく正面にすえた運動になつてもよいような気がするのですが（アメリカ合州国軍は韓国からも沖繩からも、はたまたテニアン島からも出て行くべきものなのです）、どうにもそんなふうにはなつていなくて、本土とまつたく同じかたちのものとしてあるようです。それではカッコのなかに今書いたことですが、沖繩の人たちがテニアン島の人たちに反基地闘争の手をさしのべる、いろんな知恵、手だてを整備するというようなことはなかなか行なわれ得ないのではないかと思います。

いつも思うことですが、アメリカ合州国軍の人たちの考え方のなかには、たとえば、韓国は日本の存在なしに「オキナワ」と結びついていきます。そして、その「オキナワ」はグアム島とも結びつけば、今度はテニアン島とも結びついて行くわけでしょう。今の韓国政府のえらいさんたちにもそういう考え方をしている人たちは多いらしくて、沖繩駐在（いや、彼は沖繩にいたのではなく「オキナワ」にいたつもりでいるのかも知れませんが）の韓国領事は、自分の任務は「北韓」が「南侵」を始めたときにアメリカ合州国軍の作戦活動を円滑にするためだと堂々と公けの席で公言していました。

もう一度ここでアメリカ合州国軍の基地の問題や彼らの世界戦略のことを正面にすえて考えておかないといけないのは、ひとつにはそれはじかに私たちのいのちにかかわることがあるからです（たとえば、今日日本人の誰ひとりとして、もう一度、アメリカ合州国軍がテニアン島の基地を使つて日本を空襲しに来るというようなことは考えていないでしょうが、これから百年のあいだにはいろいろなことが起こるのです）、もうひとつは、外国の強力な「軍」を体内にかかえていて、どうして「民」の根本原理である民主主義——政治、経済の両面にわたつてのそれを実現し得るかという問題にかか

わって来るからです。

私たち自身の「軍」が「民」をおさえつけ、それを引きずって歩いて一九四五年の破局にまで至ったことは今さら言うまでもない事実ですが、ただ、ここで指摘しておきたいのは、「民」もまた「軍」といやおうなしに結びつくことでそれ相応に生きて来たということです。私はここで何も「ミツビシ」とか「ミツイ」のことだけを言おうとしているわけではありません。そのあたりのことはあまりに自明なことで、それこそその結びつき、あるいは、結びついた上での生き方は「それ相応」ということばで言いあらわされ得るものではない、まさしく途方もないものであったわけですが、私が言っておかなければならないと思うのは、たとえば、日本の人びと——「庶民」ということばでもっとも適切に呼ばれるべきふつうの人びとのくらしもまた、朝鮮、中国、はたまた、メンデオラさんがかつて生まれた「南洋」を「軍」の力が直接間接に侵略した上に乗りかかっていたということです。そこではどうあがいても「軍」の論理が「民」の論理に先行していたようです。「民」は「軍」の論理にしたがって生きることとそれこそそれ相応の発展をしていた。そして、「軍」の論理が究極におもむくところとどんでん返しをくわされた。すなわち、「民」そのものが破壊しつくされた。

一九四五年の破局のはてに、私たちはひとつの決意をしたように思います。それは、もうコンリンザイ「軍」はごめんだ、これからは「民」で行く、「民」の論理で生きて行くことであつたようです。その決意は実際人びとひとりひとりの心の底から発した決意であつたのですが、ただ、そのあとの三十有余年の歴史の進行は決してそんなふうなものにならなかった。それは、アメリカ合州国という巨大な「軍」が存在していたからです。ここで、「アメリカ合州国」というぐあいについて「ア

メリカ合州国軍」というふうには言わないのは、いくさのあとのアメリカ合州国全体がどうにも「軍」の論理が優先して、それで生きて来たという感じ、いや、事実があるからです。が、日本の「民」はそこに多かれ少かれ身をゆだねることでこれもまたそれ相応に生きて来た。「特需」で儲けたというようなことばかり言っているではありません。そんなことはむしろ小さなことで、問題は、アメリカ合州国の世界戦略のなかにうまくこと位置して、そこで、たとえば、アジアへの「経済侵略」を行なつて繁栄をきざぎざ上げて来たということです。そうしてきざぎざ上げられた繁栄のなかに、たしかに日本の人びと——ふつうの人びとのくらしのひとつとつがある。いや、さらにもうひとつつけ加えて言うなら、その外国の「軍」の論理にしたがつてそれ相応に生きて来られたのが、今、彼らの都合によつて、昔のどんでん返しにくらべたらまだしも小規模ですが、経済的などんでん返しを受けようとしている。

アメリカはアメリカになった

カーター政権のありようを見ると、私はつくづくこの政権は「民」の論理の政権どころか、たいへんな「軍」の論理の政権ではないかと思うのです。ベトナム戦争以来、ウォーターゲイト事件以来、「軍」の論理に自信を失つて低迷していたのが、大きく自信を取り戻した、すくなくとも、今、取り戻しつつある。カーター政権がそうなら、カーター政権を生み出したアメリカ合州国の「民」も、「草の根」のそれまでをもふくめて、なんだかその方向めがけて進みつつあるような気がします。進み方はのろいし、いろんなジグザグもあるにちがいませんが、方向としてはそこをめがけてまっしぐら

らという感じです。その感じを一口に言えば、「アメリカはアメリカになった」という感じです。つまり、かつて私が見知っていた、自分に自信をたっぷりともって、その論理、倫理を追究する、あるいは、他人に押しつけるというアメリカで、その論理、倫理の基本をかたちづくっていたのは「軍」であって「民」ではなかった。そのアメリカのありようがまたぞろ顔を出して来ているような気がしてならないのです。いや、これは私の危惧だけのことでありません。私のアメリカ合州国人の友人知人の多くが同じようなことを言っていました。「アメリカはアメリカになった。」そのことばにたちどころにうなずいたのは、アメリカ合州国の社会で今もって圧迫を受けることの多い二世の活動家でした。

ベトナム戦争のあいだは、アメリカ合州国はかえってケンキョでなかったかと思えます。「軍」の論理の最大の根拠である軍事力においてはチップケなベトナムに負けるし、民主主義やら自由やら平等やらを誇ろうにも、どうにもやましいところがある。そこへもって来て、黒人や学生やらが騒ぎ立てる。とにかくうまく行っていないのだ——六十年代にアメリカ合州国を訪れたときの印象は「草の根」に至るまでそうしたものでしたが、かつて「アメリカ合衆国最後の古き良き時代」にくらしたこのある私にとっては、およそ、それはアメリカらしからぬ現象でしたが、今はもうベトナム戦争はすんだ、やましいところはそれでなくなつたし、大統領にだって今や「草の根」の代表みたいな人物をもっている、その証拠に黒人も学生もみんな大人しく政府に協力したりしているではないか。ボストンで乗ったタクシーの若い運転手は、かつてのベトナム反戦運動の活動家で、ローヤにも二度放り込まれたことがあると言っていました。そして、そのあとおきまりのマリファナやら何やらに熱

中したと言っていました、今はもう時代はちがう、地道に生きるのだと言っていました。

しかし、地道に生きようにも生きられない人たちはどういうことになるのか。ニューヨーク市のスラム街——いや、今はかつてはスラム街ならざるところがどんどんスラム化しているのでスラム街ということばもわざわざ使うのもおかしい感じですが、とにかく貧乏人（ということは、黒人、あるいは、プエルトリコ人ということです。ことに、今、ニューヨーク市は後者の問題に直面しています）の多いあたり、目立つのは焼け焦げた無人の廃墟のようなアパート群です。どうしてそんなところにそんなものが目立つのかというと、アパート群の家主たちから銀行が安く買い叩く、銀行が買ったところでアパート群の住人は出て行こうとしないからマフィアが何かにたのんで放火させる、ところどころ燃えてしまえば、あとは電気やら水道やらを断ち切って住めなくしてしまう。それでまったくの廃墟と化したところでぶつこわして新しい高級アパート群を建てる。肌色の黒い、あるいは、褐色の貧乏人たちはとうていそこらあたりには住めないのですから、結局、黒く、なりかかっていたニューヨーク市は白くなる。しかし、追い出された黒人やプエルトリコ人はどこへ行けばよいのか。もとのところへ帰れ。そういう意見が隠然と、いや、ときには公然と、そして、強く出て来ているのが昨今のありようでしょうが、もとのところとはどこなのか。そこから食えないので彼らは出て来たのではなかったのですか。ここでメンデオラさんやカマチヨさんの島々のことを思い出しますが、そういう運命が早晚彼らを訪れないとはかぎりません。すでにグアム島の失業率はたいへんな数字に上っているのですが、かんじんの本土での黒人やプエルトリコ人の失業者はウナギ上りに上って来ていて、これまでの最高を示しているのは周知の事実です。

しかし、それらすべてにもかかわらず、カーターさんとその政権は強引に自分の道を進もうとしているかのようです。ニューヨーク市に廃墟のアパート群がたち並ぼうが（最近、彼はそのひとつを視察に行きました）、黒人やプエルトリコ人の失業者が街にあふれようと、そんなことは百も承知の上でまっしぐらに進む。逆説的な言い方なのですが、ベトナム戦争をやっていたころのアメリカ合州国の政権のほうが、人びとの人気を博さなくてはならなかったためか、とりわけ黒人の人気とりをめざしていたこともあって、「偉大な社会」とか何んとか鳴物入りでそれらややこしいもろもろに眼をむけた。すくなくとも、そんなふりをしてみせたようです。カーター政権のほうはわれこそは「草の根」民主主義の代表なりというわけでしょうが、それで何ごとも人びとの支持を得ている、いや、得られるのだと決めてかかっているのでしょうか、そういうことにかけてはかえって強引で、ここでこわいのは、たとえば、その「草の根」にはかつての革新派、革命派の白人の若者はおろか大量の票田となる黒人は入っているにちがいないが、たいした数でもないプエルトリコ人は入っていない——事実としてそうなっているということです。これは逆に運動の側から見て行くとはつきりすることで、白人の運動も黒人の運動も今は行きどころを失っている感じがですが（今、人気のあるのは、政府のなかに入ってそれなりに革新的に動くことです）、ひとりいやおうなしに動いているのはプエルトリコ人の運動です。

実際、さまざまな逆説的な現象が今アメリカ合州国には見られるような気がするのですが、ベトナム戦争のあいだのほうがそのいくさにかまけて全体を見るゆとりのなかったせいか（そのころ、たとえば、ヨーロッパ駐在のアメリカ合州国軍の装備の貧弱さがげんは有名でした）、世界戦略をとこと

んのところでアメリカ合州国のえらいさんたちは考えることができなかったのではないか。ベトナムの人たちのたたかいによつてそれまでにかたちづくられて来た世界戦略には穴があいて、たとえば、そのあたりでつぎはぎ細工に走りまわったのがキッシンジャーさんであつた。それにくらべるとカーターさんやブレジンスキーさんのほうが、もう少し落ちついて世界戦略をかたちづくることができるところに来ているというわけでしょう。その世界戦略はエネルギー問題もふくめば他国に対する経済圧迫もふくむという雄大なものですが、もちろん、そんなことを強行できるのは、やはり、圧倒的に強大な軍事力をもっているからです。と言つても、無駄なエネルギーはそこで使わない。ベトナム戦争の教訓を受けてアメリカ合州国のえらいさんたちはもう少し賢明になっているでしょう、引きさがるべきところにはまでは引きさがる、そして、そうすることがかえつて自分を強くする。たとえば、テニアン島に基地をつくる、「中性子爆弾」を開発する。

ここでもうひとつ逆説的現象を指摘しておくなら、ベトナム戦争をやつていたころのアメリカ合州国のほうが他の国の人びとの支持を得ようとする心づもりが働いていたのでしょうか、かえつてもう少しおだやかでなかったかと思ひます。アメリカ合州国が「世界の中心」であるという印象をつとめて持たせまいとしていた。しかし、今はかえつてさかんに内政干渉じみた発言をしたり（最近のイタリヤの政局の変動に關しての「ヨーロッパ共產主義」についての警告など、まことにあからさまなものです）、強引にことを行なつたりする。メキシコに来てみて判つたのは、アメリカ合州国の本来は国内問題であるはずのカーター政権のエネルギー政策がメキシコに対してたいへんな圧迫となつて来ていることです。石油を安く売れ、さまなければ、いろんなことでいじめるぞ、というわけですが、そ

のいろんなことのなかでメキシコにとつてもつとも怖いのはアメリカ合州国に大量に出かせぎに出ている「チカノ」と呼ばれる人たちのことで、彼らが追い帰されると、ただでさえ苦しい経済状況のなかでたいへんな問題となります。ついでのことに言っておきますと、ドルに対してペソが一挙に半分ほどの値うちに切り下げられたのが一昨年(一九九四年)の九月のことです、そのせいもあつてか、ここ数年のあいだに二度ほどやつて来たときにはさほど感じなかった、そして、二十年昔にはひしひしと感じたアメリカ合州国とメキシコとの距離をもう一度ありありと感じとっているような気がします。べつにお金のことや経済むきのことばかり言っているのではない。たとえば、世界情勢やら「第三世界」やらに対する知識人の態度です。ベトナム戦争をやっていたころの、したがってそれに反対していたころのアメリカ合州国の知識人のほうが、たとえば、被抑圧者の問題をもう少し自分の問題としてとらえていた気がします。やはり、ここでも「アメリカはアメリカになった」のでしょうか。そして、「アメリカがアメリカになる」だけ、メキシコとの距離も開く。この場合、忘れてはならないのは、メキシコがかつてアメリカ合州国によつて侵略を受けた、つまり、その強大な「軍」の論理によつてさいなまれて領土までも失った国であるという事実です。実際、いつもメキシコに来て思うのは、ある意味ではメキシコほどアメリカ合州国を知るのにいい国はないということです。それはちょうど、日本を知るのに朝鮮から見るのがいちばんいいというのと同じ意味あいにおいてです。

まとめ上げて言えば、二十年昔に私がいたころのアメリカ合州国は圧倒的に強大な軍事力の上に立つて民主主義の栄光を説いていたアメリカ合州国でした。その基盤がゆらいだのはベトナム戦争のときでしたが、おかげで人びとはそこで民主主義とは何ぞやという問題に多かれ少なかれぶつかつ

たのでないかと思えます。「軍」の論理を離れて、はじめて「民」の論理の上で考えることができた。もちろん、すべてのアメリカ合州国人がそうだったというのではありませんが、心ある人はそうしていたにちがいありません。ただ、今はまた、心ある人びとの多くをふくめて、強大なアメリカ合州国の栄光とともにある民主主義に自信をもち始めているような気がします。そして、その自信にまたぞろ足をとられてしまつて、「軍」の論理、倫理に実はその栄光が根をおいているという事実が見えなくなつてしまつてゐる。これこそまさに「産軍複合体」ならぬ「民軍複合体」ですが、そうしたものがそこにできかかつてゐるような気がしてならないのです。

そして、問題は、私たちまでがそこにとらえられてしまつてはならないということです。そのためには、自分の体内にあるアメリカ合州国軍基地の存在のことから、カーター政権の世界戦略と自分とのからみあいをはつきりととらえなおすことが必要なのちがいありません。そうしないかぎり、私たちが一九四五年八月に決意したはずの「民」の論理をもつて生きようとする志こころざしはとうてい実現することにはならない、したがつて、民主主義もまたほんとうには実現することにはならない。これは自明のことでしょう。

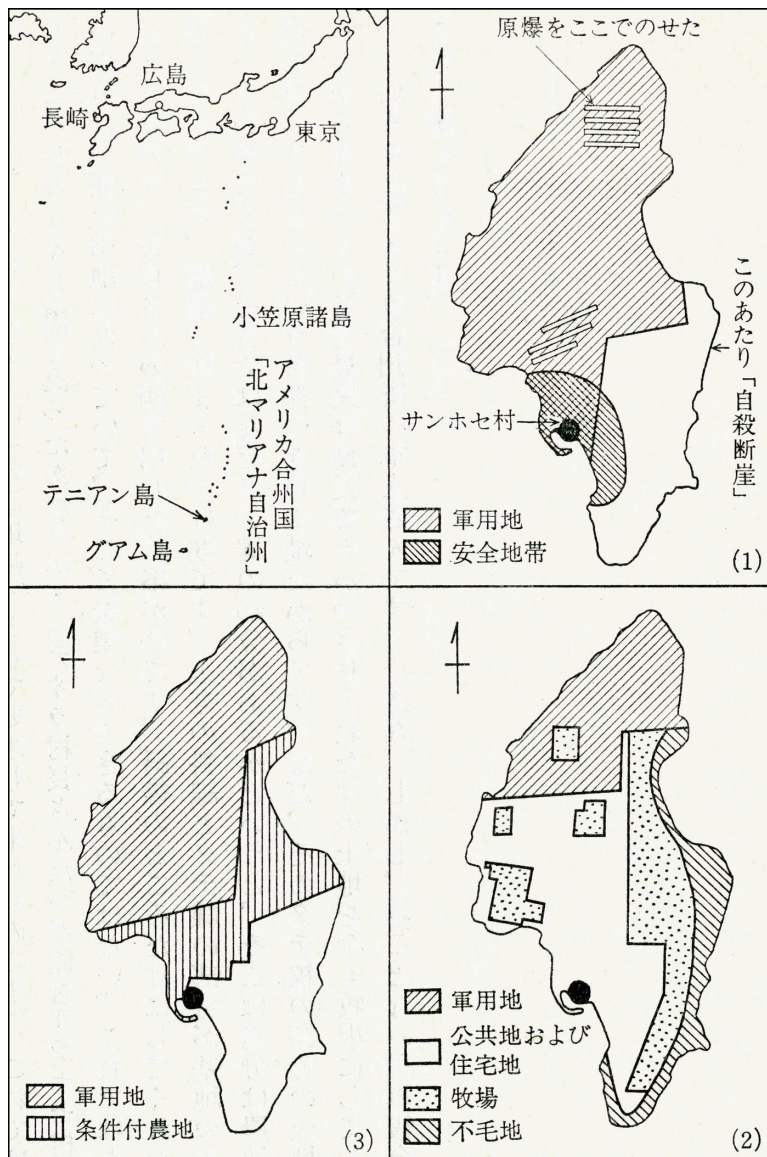
さらにつけ加えて言えば、一方の側の「軍」の論理の横行に対応して、もう一方の側にも同じことが見られるのは悲しいことですが、これもまぎれもない事実です。社会主義の栄光が、あるいは、その本家争いが強大な軍事力を背景として存在しているのが今の世界のありようですが、それがどんなにアホらしくもおそろしげなものになつてゐるかは、ここ数年来の中国のアフリカに対する政策を見ていればたちどころに判ることでしょう。首尾一貫していないどころか、ときには「CIA」とさえ

手をくみかねない。メキシコが存在するラテン・アメリカについて言えば、いまだにチリのピノチェット政権と国交をもちつづけているのは中国です。すべては「対ソ戦略」という「軍」の論理から出ていることでしょうが、おかげで、かんじんの「民」の論理がそこで破壊されてしまっている。一昨年の秋に「北朝鮮」——朝鮮民主主義人民共和国で金日成さんに会ったときに、彼が、軍備のために金をつかうのはほんとうに辛い、それだけの金を人びとのくらしのために使えればどれほどいいことか、それだけのためにも「南北の自主的平和統一」が実現して欲しいものだと言ったのが記憶にあざやかに残っています。「軍」の論理によって「民」の論理が食い破られる、それが辛いというわけでしょう。それだけこの問題は今、全世界にとって途方もなく大きな問題としてあるにちがいません。「民」の論理で生きるか、それとも、「軍」の論理に屈するか、世界はいよいよきわどいところに来ているようです。問題のあるところをさらにはつきりさせるためにもうひとつつけ加えて言うなら、これは「第三世界」にかかわることがらですが、最近のエジプトのサダトさんの行動は「民」の論理にもとづくより「軍」の論理にもとづいたものとして見えて仕方がありません。

小さな「民軍複合体」

三つの図を呈示しておきます。すべて、テニアン島の地図ですが、(1)はアメリカ合州国側が最初にこれだけの土地が欲しいと提案して来た部分を示しています。斜線の部分がそうですが（下方の反対むきの斜線の部分は「安全地帯」として要求して来たものです）、これでは住民の住むところもなくなる（黒くぬったあたりがメンデオラ村長さんたちが住むサンホセ村です）。白い部分は小高い山地

I 南海の孤島のことから



になっていて、そこで農業などできるものではない。これではあまりひどいというので、村長さんの側で出した代案が(2)です。斜線のところだけにしてくれないかと主張したのですが、結局、決まったのは(3)です。上方の斜線とタテ線の部分が基地の土地になるというわけですが、それではなぜタテ線の部分があるかというと、そこは当分は農地として農民に貸してもよいという条件付きの土地だからです。ただ、そのタテ線の部分の土地の持主はもとからきまつていて、島民は島民でもかつきりそれだけの土地を今も牧場にしてしま稼いでいるものとアメリカ合州国の軍人さんです。小さな、しかし、みごとに「民軍複合体」がここにも動いています。

つづきは製品版でお読みください。